

# 心の教育の充実に向けて

平成9年10月

心の教育緊急会議

## は じ め に

兵庫県では、先の阪神・淡路大震災から、生命の尊厳や自然への畏敬の念、思いやりや助け合いの大切さなどを教訓として学び、教育の創造的復興に取り組んでいる。

その途上で、兵庫県下において、児童生徒の生命に係る痛ましい事件がたび重なり、とりわけ、このたびの神戸市須磨区の小学生連続殺傷事件は全国的に大きな衝撃を与えた。この事件は、現在の子どもたちが置かれている状況をどのようにとらえるか、また、子どもたちの心の成長をどのように図っていくかなど、私たちに鋭く問いかけていると思われる。

兵庫県、神戸市両教育委員会は、「心の教育緊急会議」を設置し、私たち委員に「心の教育」に係る喫緊の課題について協議し、今後の教育の方向性を探るよう依頼した。

私たちは、教職員・保護者・スクールカウンセラーから見た子どもたちの実態、子どもたちの意識調査等の結果、各界の有識者等の意見等を参考にしつつ、また、昨年度の「子どもたちに生きる力を育む教育懇話会」のまとめも踏まえながら、子どもたちの現状及び「心の教育」の在り方などについて、様々な角度から議論してきた。

その協議のまとめを、「現在の子どもたちをより深く理解する視点」と「心の教育の課題・方向性・提言」の2部構成とし、「心の教育の充実に向けて」と題してここに示すものである。

現在、第16期中央教育審議会において、「幼児期からの心の教育の在り方について」審議されているところであるが、その動向も見守りながら、今後、「心の教育緊急会議」のまとめが兵庫の教育の創造的復興に活かされ、「心の教育」の一層の充実に向けた取組がなされることを願うものである。

平成9年10月6日

心の教育緊急会議

座長 河合隼雄

# 目 次

はじめに

会議の経緯..... 1

I 現在の子どもたちをより深く理解する視点..... 3

1 子どもは固有の内的世界をもっている..... 4

2 子どもたちは成長しつつある存在である..... 4

3 思春期は自己を根底から再構築する時期である..... 5

4 子どもたちの生き方の根底には人間関係がある..... 5

5 子どもたちは自分の感性や価値観に合った生き方を身につけていく..... 6

II 心の教育の課題・方向性・提言..... 7

1 生と死を考え、生命の大切さを学ぶ教育の充実について..... 8

2 家庭における基本的な生活習慣や倫理観などの育成の充実について... 10

3 情報化社会の光と影に対応した心の教育の在り方について..... 12

4 心の教育の充実に向けた教育システムの在り方について..... 14

心の教育緊急会議 委員名簿..... 16

◇ 心の教育についての有識者等の意見 ..... 17

◇ 参考資料 ..... 29

## 会 議 の 経 緯

6月28日、神戸市須磨区の小学生殺害事件の被疑者として、中学3年生の少年が逮捕された。事件の要因や少年の心の有り様については、次第に明らかにされていくであろうが、教育に携わる者はこの事件から何を学び、今後の教育にどう生かしていくのかという大きな課題が投げかけられた。

7月2日、兵庫県、神戸市両教育委員会は、事件に関わる情報の収集や当面の対応策と今後の教育課題等を検討するため、「緊急プロジェクトチーム」を発足させた。また、今後の教育課題については、大所高所から新たな方向性を得るため、有識者等からなる「心の教育緊急会議」を設置した。

「緊急プロジェクトチーム」では、昨年度の「子どもたちに生きる力を育む教育懇話会」のまとめに重ね合わせて教育課題等を検討するなど、「心の教育緊急会議」に向けて協議内容を整理した。

また、この間、現在の子どもたちが置かれている状況を多面的に把握するため、教職員と保護者からなる「心の教育に関する学校・家庭連絡会議」を設け、幼・小・中・高校部会を、それぞれ3回開催した。さらに、幅広い分野の有識者等の意見や子どもたちの生活実態調査や意識調査の結果も、「心の教育緊急会議」に反映させることにした。

緊急会議は3回行ったが、8月2日の第1回会議では、須磨区内の学校に臨時的に配置したスクールカウンセラーを中心に、子どもたちを取り巻く環境や子どもたちの心の動き等について話し合った。9月1日の第2回会議では、有識者による心の教育の課題と方向性等について協議し、10月6日の第3回会議では、そのまとめを行った。

これら3回の「心の教育緊急会議」の協議内容を、次の2点に整理した。

### I 現在の子どもたちをより深く理解する視点について

社会の変化とともに子どもたちの意識や行動も変化し、子どもたちに固有の文化や生き方があるなかで、親や教師は、これらを的確に理解できないまま子どもたちに接しているのではないか。また、子どもたちが「成長しつつあるもの」ということを忘れて、硬直化した価値観に立って指導しているのではないか。物に恵まれ、慌ただしい生活の中で、人間関係が希薄になり、子どもたちの心を理解することができにくくなっているのではないか、等の問いかけを踏まえながら、次の5つを、現在の子どもたちをより深く理解する視点とした。

- 1 子どもは固有の内的世界をもっている
- 2 子どもたちは成長しつつある存在である
- 3 思春期は自己を根底から再構築する時期である
- 4 子どもたちの生き方の根底には人間関係がある
- 5 子どもたちは自分の感性や価値観に合った生き方を身につけていく

## II 心の教育の課題・方向性・提言について

現在の子どもたちをより深く理解する視点を踏まえながら、この事件が投げかけた教育の課題や方向性について協議した。

昨年度の「子どもたちに生きる力を育む教育懇話会」は、子ども自身の生き方の問題、学校、家庭及び地域社会の課題等についてまとめているが、心の教育に関してさらに内容を深めるため、教育課題を以下の4点に焦点化した。

- 1 生と死を考え、生命の大切さを学ぶ教育の充実について
- 2 家庭における基本的な生活習慣や倫理観などの育成の充実について
- 3 情報化社会の光と影に対応した心の教育の在り方について
- 4 心の教育の充実に向けた教育システムの在り方について

\* \* \* \* \*

この「心の教育の充実に向けて」のまとめの趣旨を、今後の教育に反映させ、学校、家庭、地域社会で具体化し、効果を高めていくことが重要である。そのためには、今後とも引き続き、学校と家庭が意見を交換していく場をつくることが不可欠である。

一般に「教育」というと教え込む、詰め込むというイメージがあるが、とりわけ「心の教育」は、結論を教え込むのではなく、活動や体験を通して子どもたちが自ら体得する場や機会を準備すること、子ども一人一人が自分なりに生き方を見つけるよう支援していくことであること、つまり「教」より「育」を中心にすえるものであることを再認識しなければならない。

# I 現在の子どもたちを より深く理解する視点

- 1 子どもは固有の内的世界をもっている
- 2 子どもたちは成長しつつある存在である
- 3 思春期は自己を根底から再構築する時期である
- 4 子どもたちの生き方の根底には人間関係がある
- 5 子どもたちは自分の感性や価値観に合った生き方を身につけていく

## 1 子どもは固有の内的世界をもっている

子どもがもっている固有の内的世界を自由に表現するとともに、自己洞察を深める機会が与えられるよう、方法を多面的に工夫しながら理解することが大切である。

- (1) 子どもたちには、大人の前では無意識のうちに「よい子」のふりをする面がある。このことは、自分の情けない面や恥ずかしい面などを率直に出すと、自分が親や教師から見放されるのではないかという不安感からきていると考えられる。子どもたちは、自分自身がつくった、あるいは親や教師がつくった枠組によって抑制され、本当の自分が出せないままになっている。
- (2) 「よい子のつらさ」ということがある。よい面ばかりを強調することにはある意味では危険である。大人の幻想を押しつけられた子どもは、意識的に演技をし、無理をして、よい子になって、最後はストレスが噴出する形で爆発する。親や教師にSOSを示さないからといって、子どもにSOSがないとはいえない。親や教師にSOSを示しているのに受けとめてもらえなかったりする。
- (3) 子どもたちは流行に敏感で、子どもたちの間では、いろいろなものが流行する。一般に、「服装のみだれは非行の始まり」といわれ、子どもの行動の過程を見ずに、結果だけで判断する傾向があるが、服装や髪型は子どもの自己表現である。茶髪、ルーズソックス等の現代風俗は、短絡的に非行と結びつくものではない。流行と社会悪は別のものである。

## 2 子どもたちは成長しつつある存在である

子どもたちが人間として生きていく上で何が大切か、を理解するためには、「子どもたちは成長しつつあるもの」という認識が重要である。

- (1) 子どもたちの理解には、人間の成長という視点が不可欠である。社会のルールなどを守るという基礎的な秩序感覚や規範意識は幼いときに培われるべきであり、各成長段階で身につけておくべきことをゆるがせにすると、後になってからでは身につけにくい。現代では、子どもの概念が曖昧なものとなり、いつまでが子どもかという境界線を明確に引きにくくなってきている。
- (2) 子どもは、本来、本当にしたいことしかしないものである。させられているという義務感の中からは心の成長は生まれない。子どもの自主性や積極性を尊重することが、心に安らぎをもたらす真の成長を促すのである。
- (3) 自己存在感の希薄化が現在の子どもの特徴の一つといえる。携帯電話、ポケベルやプリクラ、あるいは虚勢をはった集団の形成等は、自分の存在感の主張であり、自分が一人でないことを確認する手段でもあるが、誤った自己存在感のアピールが、暴走行為や援助交際、薬物乱用等といえよう。
- (4) 今の子どもは、勉強以外で自分は好かれているとか、運動はできるとかという自尊心を培う機会を奪われている。例えば、野球の世界では、打率が3割あれば一流といわ

れている。教育の世界においても、全員を10割打者に育てようとする発想から転じて、その子どものもつ様々な側面の中で、一番輝いているものを見つけだし、認めることが大切である。

### 3 思春期は自己を根底から再構築する時期である

思春期は子どもが大きく変化し、内面においては心の解体と構築が同時に行われ、人間を根底から再構築する大切な時期であるということを認識する必要がある。

- (1) 思春期は、心をひっくり返してつくりかえる時期であり、いわば心の中で震災が起きていると考えられる。この時期に、これまで学んできたことを取捨して、再構築していくのである。この前提として、この再構築に耐えていく子ども自身の強さと、それを守っていく大人の援助がなければならない。
- (2) 昔はどのような共同体にも例外なくイニシエーション（通過儀礼）が存在し、これを機に、新たな自覚をもって次の成長段階へと進んでいった。こうした緊張感のある経験によって、子どもたちは鍛えられ、大人としての意識や行動を身につけていった。現代の社会にこのようなイニシエーションの儀礼が見られなくなったのは了解できるが、大切なものを失ったという自覚がなく、そのもつ意味の大きさに気づいていない。
- (3) 思春期には、性衝動や攻撃性などが旺盛になり、子どもたち自身を内側から強く揺り動かすようになる。この時期になんらかの「悪」を経験しない子どもはいない。人間であるかぎり、私たち大人にも自分でも認めたくない醜い感情というものがあり、子どもたちにも親や教師に知られたくない秘密がある。このような感情や情動をどのように受け入れ、処理していくかということは生きていく上で大切なことである。また、どんな社会にもダークサイドは存在する。そのダークサイドに気づいたとき、自らの力でどう対処していくかが、生きる力を身につけていく上で大事なことである。大人が過剰に理想のみを教えているとダークサイドを覆い隠すことになる。
- (4) 思春期にある子どもたちは、かつては大人の干渉の及ばないところで、子どもたち特有の攻撃性を子ども同士で発散させたり、自治的な子ども世界を作ったりしていた。今の子どもたちはいつも見られる対象、監視される対象となっている。大人は、子どもを監視することで自己の不安感を払拭しているが、子どもは監視されることでストレスをため、イライラしたり、より監視されにくい、よりひずんだ場所を求めて逃げ隠れすることになる。

### 4 子どもたちの生き方の根底には人間関係がある

子どもたちの生き方の根底には、人間関係が深く関わっており、心の教育の充実を図るためにも、この子どもたちの人間関係を注視すべきである。

- (1) 今日、人間関係の在り方、人と人とのつきあい方について、子どもたちのみならず大人もどうすればよいのかわからなくなっている。親子関係もお互いに気をつかいます



ぎて、何かちぐはぐなものとなってきている。

- (2) 「依存」と「自立」はダイナミックに関連しながら共存するもので、人間は依存を通してこそ自立していけるものである。子どもたちは、依存を経ながら自立していくものであり、「自立」ということを一面的に強調すべきではない。相談したり、頼っていくという「依存」も大切である。子どもが精神面で成長する過程において、他の人の手助けは不可欠である。
- (3) 子どもの心は、試行錯誤を経ることによって成長する。しかし、親や教師は子どもに成功だけを求め、失敗を認めようとはしない傾向がある。失敗への恐れから緊張状態におかれた子どもは、試行錯誤を放棄する。ダイナミックに試行錯誤を繰り返していく過程において、子どもの失敗や挫折を受け入れていくような基本的な人間関係や信頼関係が大切である。
- (4) 生命の大切さを感じさせるなどの心の教育については、大自然との関わりや深い人間関係が根本にあることも認識すべきである。人間は、大自然や人との関係の中で生きていくということが理解できてくると、生命の尊厳、思いやりや助け合いの大切さがわかってくる。

#### 5 子どもたちは自分の感性や価値観に合った生き方を身につけていく

家庭や学校、マスコミからの情報など様々な環境から、子どもたちは自分の感性や価値観に合った生き方を身につけていくということを認識することが大切である。

- (1) 今の親は、様々な生活条件との兼ね合いを考えながら、計画的に出産し、子育てをすすめる傾向がある。その結果、子どもに対する思い入れは強く、価値観や自尊心に基づいて子どもをうまく育てようとする。その典型が、いわゆる「よい学校」へ入り、「よい会社」に就職することを望むということである。
- (2) 伝統的に、子どもは「白紙」のような存在であって、そこへ親や教師がいろんなものを書き込む、すなわち教え込むという考え方があった。この考え方に立てば、何か子どもに問題が起ると、「親が悪い」「学校が悪い」「親や教師がきちんと教えていなかった」という議論になりがちである。  
しかし、子どものコミュニケーションのチャンネルが複雑・多岐となっている現代社会においては、親や教師が、自分の固定的な考え方を子どもに押しつけようとしても、それはあまり効果がなくなっている。また、子どもたちの大人に対する見方は多様であり、子どもたちは、見習うべき大人もおれば、隠れて悪いことをしている大人もいることを知っている。
- (3) 子どもたちは、この世の中を生きてゆくための生き方を、大人社会全体から学び身につけてゆく。例えば、「優しさ」「思いやり」が子どもたちに身につけられるかどうかは、現代社会における生き方として「優しさ」や「思いやり」が重要な意味や価値を持ちうるかどうかにかかっている。大人が、競争社会においても「優しさ」「思いやり」が非常に意味があるという実際の生き方を示さないと、どんなに言葉の上でメッセージを発しても、子どもたちは受け止めない。

## Ⅱ 心の教育の課題・方向性・提言

- 1 生と死を考え、生命の大切さを学ぶ教育の充実について
- 2 家庭における基本的な生活習慣や倫理観などの育成の充実について
- 3 情報化社会の光と影に対応した心の教育の在り方について
- 4 心の教育の充実に向けた教育システムの在り方について

# 1 生と死を考え、生命の大切さを学ぶ教育の充実について

## ア 課題

- ① 現実と非現実、生と死の境目が非常に見えにくくなってきており、生命の尊さやいのちの重みを実感として捉えきれない子どもたちが増えてきている。

一世代前の子どもたちは、地域社会における大人や異年齢の仲間との交流などを通じて様々な生きる知恵を身につけ、現実と虚構の区別や生と死の持つ意味について自ずと理解し、死に対して一定の抑止力が働いていた。

しかし、最近の子どもたちは、メディアの急激な発達によって日常的に仮想の死に接する機会が多く、生を実感として捉えにくくなっている。テレビゲームや劇画、ホラービデオ等を通して、子どもたちは一日に何回となく仮想の死を体験する。このため、人を殺したり傷つけてもリセットすれば簡単にやり直しがきくと考えている子どももいる。こうした傾向が、いのちの重みに対する感受性の希薄さや死生観の変容をもたらし、死ぬことは怖いと思わない子どもたちを生みだしているのではないか。

- ② 昆虫などの生き物と接触する機会が減少し、日常の生活のなかで生命あるものを身近に感じるものが少なくなっている。

子どもたちは、塾や勉強などに追われるゆとりのない生活の中で、それぞれの発達段階にふさわしい遊びを喪失している。このことは、戸外や野外における様々な生き物とのふれあいや豊かな感動体験の不足につながっている。

一方、家庭内においては、それぞれの部屋が与えられ、蜂の巣のように仕切られた生活空間の中でテレビゲームやビデオに夢中になる子どもが増え、家族との会話や身体によるコミュニケーションが断たれている。とりわけ高層マンションに象徴される都市部においてはその傾向が一段と強く、そこでは遊び場が失われ、ペットなどの飼育も禁じられ、保育所や幼稚園で初めて昆虫を見るという子どももいる。

- ③ 核家族化の進展に伴って、子どもたちが家族の死に直面することが少なく、死のもつ意味を考える機会が減少している。

死は、日常的な生活の延長線上に存在する当然の出来事であることを、人は誰に教わるでもなく捉えていた。しかし、近年、人の誕生や死の病院化が急速に進行し、生や死が家族や日常生活から切り離されることが多くなった。子どもたちは祖父母や身近な者の死に直面することが少なく、肉親の喪失体験を自らの生き方に生かす機会が失われている。このため、人の死に対する感受性が弱いものになりがちで、死の現実性が希薄になった分だけ、逆に生の重みが見えにくくなっている。

## イ 方向性

### ① 生命に対する畏敬の念を豊かに醸成する。

子どもたちは、阪神・淡路大震災を通して、いのちの大切さ、生きていることの素晴らしさを学んだ。今、生きて在ることを考えることは、自分の生命を大切にするとともに、他人や生き物すべてのいのちの大切さを学ぶことにもつながっている。老人ホーム等でボランティア活動をしている子どもたちのいきいきとした表情や、高齢者の嬉しそうな顔を見るとき、今日の学校教育や家庭教育で忘れられがちな本質的なものが、その営みの中にあることを改めて実感する。また、病院や保育所における乳幼児とのふれあいの体験等を通して、個としてのいのちが遠い祖先から連続と受け継がれ、次代につながっていく生命体として存在していることを学ぶなど、生命のもつ神秘や不思議さに目を向けさせることも大切である。

### ② 「生と死を考える教育」を推進する。

人間であるかぎり死を免れることはできない。死というものを意識し、自己の存在の有限性を自覚するとき、人は、かけがえのない人生の大切さを認識し、より豊かに、より積極的に生きることを考えていくものである。生と死に対する感受性が希薄になった今日、死をタブー視することなく、子どもを亡くした親の体験談やペットの死などを通して、死を身近な問題として捉え、生と死のもつ意味を考えさせることが大切である。

子どもたちが成長の過程で、そうした悲しい死別を受け入れ、よりたくましく生きていくための支援をすることも大人の責務である。このため、子どもたちに豊かな人間関係を育むとともに、「生きることの大切さ」「生きていることの大切さ」「生かされていることの大切さ」を学ぶ教育を推進していくことが求められている。

### ③ 自然体験、生活体験などの機会の充実を図る。

近年、子どもたちの遊びを通しての自然体験や生活体験などの機会が減少している。そのことが人間関係の希薄化や社会性の欠如につながっている。自然の中には美しいもの、恐ろしいものなど、様々なものが渾然と存在している。その意味からも、未知のものとの出会いや冒険への挑戦、仲間との交流を通して、子どもたちに、自然に対する畏敬の念や逞しく生きる力を育むことが大切である。

## ウ 提言

- ① 震災体験を語り継ぐ子どもの集いの開催
- ② 医療福祉施設等における乳幼児ふれあい体験や介護体験等の充実
- ③ 家族の死等をテーマとした学級活動の展開
- ④ 教職員「生と死を考える研修講座」の実施
- ⑤ 生き方を学ぶ性教育の充実
- ⑥ 自然学校などの体験活動の充実
- ⑦ 祖先祭祀や墓参などの伝統行事の理解と継承

## 2 家庭における基本的な生活習慣や倫理観などの育成の充実について

### ア 課題

- ① 親子とも時間的にゆとりのない生活の中で、ふれあいの機会が減少し、社会で生きていくために必要な規範意識等が十分身につけていない。

子どもたちの多くは、ゆとりのない生活を送っているが、一方、親たちも遠距離通勤、単身赴任など仕事中心のライフスタイルによって、ゆとりのない生活を過ごしている者も多い。家庭生活において、親子のすれ違いも多く、また、祖父母から生活の知恵を学んだり、家族でふれあう機会が減少している。その結果、本来、親と子の絆の上に涵養されるべき基本的な生活習慣や生活能力、豊かな情操や善悪の判断力などが、十分身につけておらず、家庭における基本的な育成機能が低下している。

- ② 親の過保護、過干渉が子どもの自立心の育成の妨げとなっている。また、家族のなかでの葛藤や議論が少なく、本音でぶつかる機会が乏しくなっている。

親たちはややもすると、子どもの希望や個性よりも自分の考えを先行させ、過保護・過干渉になりがちである。子どもが自分の意志で何かを選びチャレンジしようとしても、待つことのできない親はつい手をだし、子どもの自立の芽を摘み取ってしまう。

また、家族間にあっても、互いに争わないことや問題を起こさないことを最優先させ、各個人の欲求を抑圧し、消滅させている。父親が仕事にとじこめられ、父子対決の場がなくなるなど、家庭内での議論が減少し、表面的には穏やかであるが、かえって子どもたちのストレスをためることになり、子ども自身の社会的自立をますます遅らせることになる。

- ③ 家庭が、子どもたちにとって心の居場所でなくなりつつある。

本来、家庭は子どもにとって活力の源泉であり、疲れた心、傷ついた心を癒してくれる場所である。しかし、経済的に豊かになる中で、親の価値観で子どもたちに高学歴を求めたり、親の好みを押しつけたりするなど、親子の関係も親からの一方的なものになりがちで、子どもたちの示すさまざまなサインの裏にある痛みや悲しみを感じ取ることができないでいる。

子どもは親に甘え、親の愛に十分満たされたとき、安心して新しいものにチャレンジする。子どものチャレンジは親の愛を常に確かめつつ行われるものであるが、今や、子どもたちにとって、家庭は真に心の安らぐ居場所でなくなりつつある。

### イ 方向性

- ① 子どもが社会人として生きていくために必要な規範意識の育成は、本来的に家庭が担うべきものであり、その機能を高めるため、親の意識変革を促す。

基本的に、子どものしつけは、家庭が受け持つ部分であり、生きる上での大切な価値観を子どもに伝えることは、親の果たすべき責任の一つである。子ども自らの価値観が築けず内的規範が弱いと、とかく肩書などの外的権威にとらわれてしまう人間となりやすい。

社会人として必要な規範意識は、特に幼児期からの親や祖父母との関わりを通して培われるものである。こうした家庭の教育機能の一層の充実を図るため、さまざまな学習機会や場をつくり、親たちの意識変革を促すことは重要である。

② 子どもに真の自立を促し、得意な分野を伸ばし、積極的な生き方を身につけさせる家庭教育を進める。

成長過程にある子どもたちに、親や家族に愛されていると実感させることは大切である。他者に全く依存しないことが自立を促すのではなく、家族の愛情に支えられてこそ子どもの自立は堅固なものになる。依存と自立の共存は、他人への思いやりや調和のとれた人間形成を図る上で極めて重要である。それを前提としながら、一人一人の子どもの個性をかけがえのないものとして尊重し、得意とする分野を豊かに伸ばし、積極的な生き方を身につけさせる家庭教育を進める必要がある。

③ 子どもたちの自尊感情など豊かな心を育むには、地域全体で子どもを育てるという気運を高め、家族そろって地域活動などに参画することが大切である。

豊かで便利な今日の生活が、子どもたちの人格形成の上でマイナスの働きをしている場合が多々見られ、親だけで子どもを育てることが難しい時代となっている。また、核家族や少子の家庭にあって、子どもは、人に好かれたり、他人と比べて運動能力がすぐれているなどという自尊感情を持つことは難しい。自尊感情など豊かな心は、先輩や友だち、年少の子どもたちとのふれあいの中で培われてくるものである。家庭は地域社会を構成するものであり、家族そろって地域の行事等に積極的に参画することにより、人間関係が豊かなものになり、子どもたちの自尊感情も高まっていく。そのためには、地域社会が本来もつ教育機能が活性化することが求められており、新たな組織的、意図的な取組が必要である。

#### ウ 提言

- ① 家庭教育を考える全県フォーラムの開催
- ② 心の教育の充実のための学校・家庭連絡協議会の開催
- ③ 父母の職場見学会の実施
- ④ 親子で体験できる活動機会の提供
- ⑤ 祖父母等の協力による子育て学習活動推進事業の拡充
- ⑥ 地域社会における家庭教育支援システムの検討
- ⑦ 家庭・家族等についての教育内容の充実と指導方法の工夫

### 3 情報化社会の光と影に対応した心の教育の在り方について

#### ア 課題

- ① 情報化の進展は、創造的な活動の展開を容易にした一方で、人間関係の希薄化や直接体験の不足など、深刻な教育問題も生みだしている。

インターネットの普及などにより、情報空間が飛躍的に拡大し、子どもたちはメディアを通すことによって、居ながらにして人々と容易に情報を交換できる。また、メディアを使って自己表現を行うことで豊かな感性や創造力を養うこともできる。

しかし、光が明るければ明るいほど、影は濃くなる。インターネットの普及により距離や時間の観念が変化し、文字によるコミュニケーションが増える一方で、直接の対話やそれに伴う感情といった要素が減少していく。インターネットやパソコン通信などを介した人間関係は、人と人との直接のつながりとは異なり、子どもたちは、社会をつくっていくための連帯感、協調性を失い、直接体験への意欲と関心を一層減じることになる。

また、ここ10年余りの情報技術の飛躍的な進展に伴って、日常の生活に便利さと豊かさがもたらされたが、一方においてはインターネットやパソコン通信等におけるプライバシーの保護など、様々な問題が指摘されている。

- ② ゲーム機器を中心とした遊びが増え、生々しい感情や言葉のやりとりから、他人の心の動きを感じる機会が少なくなっている。

今の子どもたちは、かつてテレビの映像を受動的に見るだけであった世代とは異なり、映像の中に自らが主人公として入り込むことができ、いろいろな感情体験は可能である。また、テレビゲームなどによって、孤独が癒されたり、ストレスを発散することもできる。しかし、それは、仲間との喧嘩や遊びの中での、痛みや涙などの生々しい現実感覚を通したものではない。「たまごっち」などのペットを育てるゲームも同様で、操作を失敗して死んだとしても、ボタンを押せば生き返るといような非現実的な体験をしている。このような体験は、実体験が豊富でない子どもたちに強烈な印象を与え、その結果、現実の物事をゲーム感覚で見る子どもをつくり出すことになる。

#### イ 方向性

- ① 幼児期から生活体験や自然体験などの直接的な体験を積み重ね、みずみずしい感性や豊かな人間関係を育てる。

情報化社会においても、子どもたちのみずみずしい感性や豊かな人間性を育てるためには、実際に自然とふれあい、生き物に触れることが不可欠なことである。

成感・成就感などを感得させるとともに、力強く生きる逞しさを育むことが必要である。

また、学校においても、自然体験学習や福祉体験学習などの校外学習をさらに充実させ、それらの体験を通じ、異年齢層や地域の住民との直接的な交流を深めることが大切である。

② テレビの多チャンネル化等、多種多様なメディアを活用することにより、子どもたちの心を豊かにさせ、多面的・多角的なものの見方を身につけさせる。

今後、テレビの多チャンネル化やインターネットの普及はますます進み、子どもたちは、世界中の人々の暮らしや、政治・経済・文化等の情報を瞬時にして手に入れることが可能になる。マルチメディアの発達は、子どもたちの内的世界を飛躍的に拡大させ、豊かな社会観や歴史観を身につけるうえで、たいへん大きな役割を果たすことになる。子どもたちは様々な社会の動きや事件の真相を多面的、多角的に検証できるようになる。

ただ、氾濫する情報のなかには、親や教師から伝わる公共的信頼に合う情報もあれば、それに反する情報もあり、それらの情報に対して、適切に処理、選択する能力を養うことが肝要である。

また、情報の活用を通して子どもたちの心の成長を支援するため、教職員の情報リテラシーの向上が急がれる。

③ 子どもたちの健全な心の成長を促すための情報リテラシーの育成に努め、情報化社会のもつ影の部分についても指導の充実を図る。

子どもたちに、情報化社会の特質及びその進展がもたらす社会や人間についての影響を考えさせるとともに、情報の発信者としての自覚や、それに伴う責任とプライバシー等の保護といった情報倫理を身につけさせることが大切である。

また、情報化が進展する中で、メディアが子どもたちに与える影響は極めて大きい。報道の自由や表現の自由は尊重されなければならないが、この度の事件において、一部のマスコミにみられた過剰取材やプライバシー侵害などについては、子ども豊かな人間性の涵養を図るため、関係者の理解と協力を強く求めていくことが必要である。

#### ウ 提 言

- ① 情報倫理に関する実践的研究の推進
- ② 高度情報化社会に対応した教員研修
- ③ 映像コンクール等の開催による映像作品の奨励
- ④ 教育情報ネットワーク（インターネット版）の拡充
- ⑤ 情報処理技術者等の積極的活用
- ⑥ 感性を豊かにする感動体験の推進



#### 4 心の教育の充実に向けた教育システムの在り方について

##### ア 課題

- ① 過度の受験競争にとらわれた学校教育の画一的な側面が指摘されており、子どもたちに必ずしも十分な成就感や満足感を与えるに至っていない。

学校では、興味・関心、能力・適性等の異なる子どもたちが、一斉に一定時間の授業を受けることが多く、学習や進路の目標が達せられない子どもたちは、挫折しかねない状況にある。また、興味・関心を持っている分野を伸ばす方策が確立していない面もある。その結果、個性を伸ばす教育が叫ばれているにもかかわらず、満足感が得られずストレスをためこむ子どもや、学校がつまらないと感じる子どもをつくり出している。

- ② 学校教育で対応できない精神面、心理面での専門的ケアの必要な子どもが増えている。

昔から情緒や感情に障害のある子どもは存在したが、その中でも今、世界的に行為障害（他者の基本的人権や社会的ルールを無視する行動様式が反復または持続すること。）の子どもが増えている。この行為障害については、子どもが家庭で目に見えない虐待を受けている可能性が高いと言われ、専門的ケアが必要である。このように教職員だけでは、対応しきれない状況が生まれてきているにもかかわらず、教職員の心理として、自分たちだけで問題を抱え込もうとする傾向が強い。

- ③ 学校では、教職員がゆとりを持って子どもたちと接する時間が少なく、多様な子どもたちに十分に対応しきれない場合がある。

子どもたちの日常の言動の奥にある自己表現を、表面的な言動だけで推し量ることは難しい。友だちをたくさんつくれる子どもが単独行動をとったり、逆に、いつも仲間と楽しそうに見えるように見えて、実は友だちが一人もいない子どももいる。教職員は、そんな子どもたちの性格や感性、その場の状況をみきわめて、適切なアプローチを試みることができない場合がある。

また一方で、本来家庭で行うべきことが学校教育にシフトされ、教職員の大きな負担となっている。さらに、放課後の会議、部活動など、教職員の仕事は多岐にわたっており、子どもたちとゆっくり話すゆとりが減少している。

##### イ 方向性

- ① 子どもたち一人一人を大切にし、個性を伸ばす教育の充実に向けて、学校全体の弾力的な指導体制や指導方法の改善を図る。

子ども一人一人の良さや可能性を伸ばすためにも、また、過度の受験競争を緩和するためにも、高校入試の在り方について抜本的な検討が必要である。さらに、低

年齢からの過剰な塾通いがもたらす問題点もあり、ゆとりある教育システムの構築が求められる。また、学校の授業において、子どもたち一人一人がより活動的、主体的に取り組めるよう指導方法の研究や、指導体制の改善が望まれる。

ある学校では、子どもにカリキュラムを選択させることによって、ストレスや不満を減少させたことが、実践例により報告されている。そこで、学校における選択履修のより一層の拡充を図るとともに、発達段階に応じて時間割を子どもに決めさせる制度を導入していくことなども検討の余地がある。

② 子どもたち一人一人の様々な生き方に対応するために、学校以外の教育機関等を積極的に活用する。

子どもたち一人一人の主体的な生き方を尊重するためには、学習機会、学習場所等について多様な選択を認め、また、用意する必要がある。

登校拒否など、子どもの状況によっては、家庭や学校以外の教育機関等の学習成果も履修として認めるなど、従来の学校だけがフォーマルな教育の場であるという考え方、学校以外のものを排除するような教育の仕組は改善の余地がある。これからは、子ども一人一人の興味・関心、能力・適性等に応じた、学校とは別のルートも積極的に認知し、とりわけ、精神的な措置、ケア等が必要な子どもには、それにふさわしい専門機関に委ねていくことが肝要である。

③ 子どもの内的世界を多元的、総合的に理解するために、学校外から、カウンセラーなどの専門家を招聘する。

教職員とは異なる視点を有した専門家等を学校のなかに導入し、相互に連携を図りながら様々な角度から、総合的、立体的に子どもを見ることにより、これまで見逃されがちであった子ども一人一人の個性を積極的に評価していくことが必要である。また、子どもたちは、教職員以外の大人との交流により別の人間関係も生まれ、多様な生き方や価値観を学ぶこともできる。

さらに、外部講師等による研修会を開催して、教職員のカウンセリング能力を高めたり、子育てや家庭教育に不安をもつ保護者への相談活動を充実させるなど、学校・家庭・関係機関の連携を強化することが大切である。

## ウ 提言

- ① 個性重視、受験競争緩和を目指す抜本的な高校教育改革
- ② 小学校高学年からの教師や教科を選択できる個人カリキュラム制度の導入
- ③ 学校外での学習に対する単位認定の弾力化
- ④ 中学校における長期体験学習の導入
- ⑤ 養護教諭によるヘルスカウンセリングの充実
- ⑥ スクールカウンセラーの拡充
- ⑦ 学校への社会人等の外部講師導入
- ⑧ 多様な問題に対応する心の教育相談センターの設置
- ⑨ 様々な教育課題に対応する学校・家庭・関係機関等の連携システムの構築
- ⑩ ゆとりある教育の推進に向けての研究指定校等の見直し

# 心の教育についての 有識者等の意見

【 聴取目的 】 神戸市須磨区における児童生徒の生命に関わる事件等を踏まえて「心の教育」の充実を図り、今後の施策に生かすため、幅広い分野の有識者に、下記課題の中からご意見をお聴きした。

- 【 課 題 】
- 1 「心の教育」を浸透させ具体化するにはどうしたらよいか。
  - 2 日常生活において「社会のルールを大切に作る心」を育むにはどうすればよいか。
  - 3 生命の尊厳を具体的に学ばせるにはどうすればよいか。
  - 4 現在の子どもたちを理解するためにはどのような新たな視点が求められているか。
  - 5 情報化の光と影に対応した教育を推進するにはどうすればよいか。
  - 6 青少年の健全育成の取り組みをどのように工夫すべきか。

【 聴取時期 】 平成9年8月

## 意見聴取者及びテーマ一覧

(50音順)

氏 名	聴 取 テ ー マ 等	所 属 等
浦 部 法 穂	個性に応じた適切な自己表現の指導を	神戸大学教授
柏 木 恵 子	親にとって子どもとは何か	白百合女子大学教授
川 原 泉	ほのぼの教育のすすめ	漫画家
衣 笠 祥 雄	スポーツを通して見た子どもたち	広島県立大学客員教授
張 麟 声	外国人から見た日本の子どもたち	中国・山西大学 日本語日本文学科長
永 田 萌	戦後の教育の中で目を向けられなかつたもの	イラストレーター
西 和 彦	情報化新時代と子どもたち	株式会社アスキー 取締役社長
速 水 順 一 郎	子どもの現状と子どもをとりまく社会の問題点	兵庫県子ども会連合協議会 事務局長
森 隆 夫	時代が求める教育の創造	お茶の水女子大学名誉教授
横 山 利 弘	現在の子どもたちを理解するための視点	関西学院大学教授

## 個性に応じた適切な自己表現の指導を

神戸大学教授 浦部 法穂

- 1 今回の須磨の事件の普遍性  
衝撃的な事件ではあるが、騒ぎすぎ。私は今回の事件を、あまり特異な事件だととらえていない。確かに犯行の手口とか事件の出方に特異なものはあるが、普遍的に存在する要素がある。
- 2 先進国病  
自分が何者か分からない。今の子どもたちの目標は、いい学校へ入って、いい会社に就職することしかない。いい会社に入って何をするのかというと、何もない。これは先進国の社会（経済）の仕組みの問題としか言いようがない。人間が物を作らない。金さえあれば物が手に入るが、心の満足は得られない。自分が何者なのかを見つけ出すことができない。アメリカならドラッグへ逃げる。そういう意味では問題は共通している。
- 3 規範意識の薄れ  
いま特にとりより、日本社会は伝統的に規範意識が薄い。日本の場合「きまり」は、自分たちでつくったものではなく、上から命令されたことというとらえ方が強い。守らないと罰を受けるから守る。逆に罰を受けなければ何をしても構わないという意識がある。自分たちのものでないから、ばれなければいいと思うし、「きまり」で禁じていないければ何をやってもいいと思う。契約社会の欧米では、憲法や法律も人々が取り交わした契約である。自分たちが契約によって政府・国家を作り、それを契約にしたがって運営する、という観念がある。
- 4 コミュニティの崩壊  
日本文化のなかにもすぐれた解決方法があった。「きまり」だから、というのではなく、お互いが納得できるまで話し合っ解決する、という方法だ。しかし、その「場」としてのコミュニティの崩壊で、日本文化のいい部分を押しさえ込む形で法や規則が機能するようになった。「きまり」だから、というので力のあるものが押しさえつけるようになった。学校の問題も同じだ。そしてまた、地域の問題解決能力がなくなって、何かというときにすぐに学校に言うという傾向も出てきた。今回の事件で、地域の人々が被害者や容疑者の家族を守ろうとしたことは、不幸な事件のなかでもいいことだった。
- 5 校則の問題  
「きまり」だから守れ、と言うのではなく、なぜそうしてはいけないのか（そうしなければならぬのか）ということをお互いに納得させなければならぬ。納得できなければ守れない。頭ごなしにやると、小さい子は守るかもしれないが、ずっと疑問に思っている。その疑問が、いずれそのルールに逆らうような形となって現れる。「服装の乱れは非行の始まり」はまちがいの。ダメだといって押しさえつけている大人が非行に走らせている。服装も髪も自己表現である。ただ、子どもは自己表現の仕方がまだ十分に分からないから、おかしい恰好を試してみたり、という形ででてくる。そう受け止めて、その子にあった適切な自己表現の仕方を指導するやり方はできないのか。自分や他人を傷つけないかぎり、やりたいところまでやらせてよい。いつか気づく。
- 6 地域とのつながり  
学校は地域から閉ざされている。学校の役割は大きいので、学校のなかのことを地域に戻してゆくことが大切だ。いじめ問題なども、PTAだけではなく地域で対応することを考えないといけぬ。
- 7 自他の違いの認識  
欧米では、小さいときから、自己表現の仕方を教えている。自分はどのような人間かを自己表現するところから出発し、次に他人との違いを認識し、どう協調させていくかが課題となるのが欧米。日本の場合、学校教育でも、まず、まわりとどう協調していくかが先にある。人権という観念は一人ひとりがみな違うところから出発している。みな同じだから平等、ではなく、みな違うからこそ平等でなければならない、ということなのだ。

# 親にとって子どもとは何か

白百合女子大学教授・東京女子大学名誉教授  
柏木 恵子

- 1 子どもは親の生産物になった  
今日、少子化が騒がれているが少子化の時代はかつていくらでもあった。ただ昔の、何人か生まれても2人しか育たなかった結果としての少子と今日のように科学や医学が進歩し、2人生めば2人育つ少子化とは決定的な違いがある。  
かつて、子どもは自分たちの意志や手に及ばない、神あるいは人知を越えたものから授かったという思いが強かったが、今の子どもは親の計画的な決断のもとに生まれてきている。つまり親の生産物になっている。
- 2 子どもの価値が相対化されてきている  
今の時代は、他（経済、仕事、レジャーなど）との兼ね合いを考えて産むというように、親の選択の結果子どもは産まれてきている。  
60才代の女性は、まだ、結婚したら子どもを産むのは自然で当然のこと、女性としての務め、家を継いでもらう家族のためという意識が強いが、40才代の女性は、夫婦2人の生活は十分楽しんだ、やりたいこともやった、経済的にも余裕が出来た、自分自身の生活に張りを持たせるために、条件が整ったから産むという考え方が多くなっている。  
今の子どもは、親の意思や好みや条件次第で産まれてきている。
- 3 子どもは今や、親の持ち物になっている  
上のような状況の下で、いつ、何人、産むかが決められる。その結果子どもは親の持ち物になり、子どもの希望や個性よりも親の考えが先行し、思い入れも強くなる。子どもが望んでいることよりも親自身の自己愛のために、いい学校いい会社に入れようとする。汚しては困るようなブランド服を着せられる。子どもは親自身の価値観や好みで生かされているといえる。  
子どもが親の持ち物になると、子どもだけで自由にのびのび遊ぶとか、働くことが失われるなど、子どもが育つ上で必要な経験が奪われて、頭でっかちになり、生活する上での生きる力が欠けてくる。
- 4 今の親は、責任ある子育て、教育ができる資格を失いつつある  
親だけに子育てをさせることが難しい時代がきている。社会が子どもを育てる機能を強化する必要がある。  
勉強以外で、自分は人に好かれるとか、運動は出来るとかという自尊感情が子どもにない。それが育つチャンスもない。それが育つチャンスは集団の中にある。ある保育所で4才児の男の子が、よちよち歩きの子を見て、オムツを持って保母さんを連れてきた。4才ぐらいの子は1才児がオムツを濡らしていることに気づき、助けてやっている。これが自然に行われる教育であり、家庭では決して出来ない。地域で、組織的に子どもを育てることを意図的に仕組んでいかなければならない。
- 5 今の母親は、自立できない子供をどんどん作っている  
学歴などというものが価値があるのは、職業生活、会社勤めまでのことで、それ以後は学歴は役に立たない。結局のところ、お互いに自立していない夫婦は中年離婚が多いという結果になってきているのは、男女ともに、それぞれ自立的に生きる力が備わっていないことによる。生活が豊かになったからといって子どもにまで衣食住を豊かにしてやる必要はない。もっと、豊かで多様な経験をさせてやり、生きる力の基礎を培ってやるのが大切である。
- 6 生命の尊さなどというものは理屈では教えられない  
生命の尊さは、子供自身が、小さいながら赤ちゃんを抱いて、あやして赤ちゃんが笑ったとか、お年寄りと過ごして、立派な人でもいつかは老いて亡くなっていくことを実体験することで自然に身につけていくものである。今の時代、こういうことも意図的に作っていくことが求められている。

# ほのぼの教育のすすめ

漫画家 川原 泉

## 1 慌てずにじっくりと

米国の例では、サイコパス（精神病質者）が最初に裁判所に姿を現すのが、ほぼ14歳であると言われています。今回の事件が、もしサイコパスによるものであれば、それはあくまでも個人的な問題であり、子どもたち全体の問題として捉えるのは「子どもに対して失礼だよな。」と感じます。昔の大人は、何か事が起こってもどっしりと構えており、そのことが逆に子どもの心に安心感と大人に対する尊敬の念を抱かせたものです。今こそ大人は、動揺せずにやせ我慢でもいいからあえてゆっくりと対処していくべきではないでしょうか。

## 2 親の役目

自分がされて嫌な事は人にしないと子どもに教えるのは親であって、地域社会でも学校でもない。今、この辺りの境界線が曖昧になって混乱しているのでないのでしょうか。学校で教える事は、知識と集団生活のノウハウだけですよと、学校側もできることとできないことをはっきりさせるべきです。

## 3 ファミコン大会

子どもが夢中になっているものについて、大人は客観視するだけでなく一度体験してみたらどうでしょうか。例えば、授業で人気のある少年漫画の単行本を教材としてみたり、「今日の1時間目はファミコン大会にしよう。」など、とにかくやってみることで。意外と楽しかったり、難しかったり新たな発見につながるかもしれません。また、ファミコンを通しての会話から理解が深まることもあります。今でも覚えているのは、授業中の言葉ではなく教師との雑談中のものばかりです。しかし、子どもたちに迎合する必要は一切ありません。感じたままを子どもたちにぶつけていけば良いのです。子どもを通して物事を判断するのでなく、自分自身が直接体験することをお勧めします。

## 4 ショック療法

幼い頃にテレビのドキュメンタリーで「薬物中毒」の特集を見て以来、薬物に対するアレルギーを持ちつづけています。現在、青少年に蔓延している社会悪についても、幼少期に適切なショック療法を施すことによって、未然に防げたかもしれません。言葉による指導より、結果を見せる方がインパクトがあり、効果的な場合があるかもしれません。

## 5 ほのぼの先生

肩肘張って頑張って、悲壮感さえ漂わせている先生を見ると、学校の先生はどうしてあんなに真面目なんだろうと不思議です。万人向けの完全教育はこの世に存在しないのですから、もっといい加減で楽観的な感覚で良いと思います。不安感を胸に持ちながらの教育は、両者を隔てる壁をさらに高くするだけで、プラス要素は見当たりません。

## 6 「笑い」の大切さ

人間だからこそできる「笑い」を大切にしたい。私の漫画も「笑い」の要素をベースとして考えています。個性のある者が集まるからそこに「笑い」が生まれてくるわけで、金太郎飴の集団に本当の「笑い」が存在するのでしょうか。つまり、全員を「いい子」にしようとする教育は「心のない教育」と言えます。学校においても家庭においても、1日1度は皆で一緒に「笑い」に出会える環境づくりが大切です。

# スポーツを通して見た子どもたち

広島県立大学客員教授 衣笠 祥雄

## 1 躰けと学校教育

今回の事件は、突然起きたものではなく、多くの登校拒否、不登校児が現れたことの延長線上にあると思う。特異な事件ではあるが、世の中にこのようなことをする大人や子どもがいても不思議ではない。オウム真理教の問題にしても、優秀な学校を出た人が、何故あのようなことをするのか。この度のことを含め、高度な教育を受けたから「やる」「やらない」というものではない。基本的に学校は、子どもたちが学問を教わる場所であり、躰けや礼儀、礼節は、家庭が受け持つ部分である。

## 2 得意分野を育てる

野球の世界では、失敗率が7割以下であれば(3割以上を打てば)一流とされているが、教育の世界においては、余りにも失敗を恐れすぎているように思う。全員を10割打者に育てようとする発想から転じて、個々の得意分野を生かす方策を考える必要があるのではないか。子どもたちの得意分野を見つけ出し、伸ばしてやる努力を学校、家庭双方がすることにより、4割、5割の強打者が生まれてくる可能性もある。いろいろなジャンルの中で、一番輝いているものを見つけてやり、一番良いところを認めてやるのが大切である。

## 3 指導者の適切な情報処理

スポーツの世界においても情報は必要不可欠な要素になってきている。「俺が出来たから、お前も出来る。」等の根性主義的指導法では、良い結果は期待できないし、選手もついてこない。指導者はスポーツ医学、生理学等の理論武装をした上で、必要なデータを示し、お互いに納得しながらのトレーニングが主流となってきている。また、各種メディアの発達、指導者のみならず、選手レベルでも簡単に多くの情報を得ることを可能にしたため、指導者との情報のズレが、指導方法に対しての疑問に変わり、指導者への不信感を生み出す。現実には、解決策を見いだせないまま長いスランプに陥る選手も数多くいる。

現在の子どもも同様に、情報を持ちすぎて、それを自分の中でのみ使いすぎるきらいがある。このようなことから、指導する立場にある者は、出来る限り多くの情報を採りし、比較し、吟味し、そして、整理するなどの努力を怠ってはならない。

## 4 流行と社会悪

「全国こども電話相談室」をしているが、巷で取り沙汰されている援助交際や薬物乱用等に係わっている者は、ごく一部であることを実感している。例えば、ルーズソックス、オートバイなど、若者の風俗を短絡的に非行と結びつけるマスコミ等に対しては、毅然とした態度で抗議するくらいの自信を教育委員会としても持つべきである。流行と社会悪との違いを大人が明確にしないで、子ども社会の現状を批判することはよくない。

## 5 新任教員の育成

文部省の洋上研修で新任教員と接する機会があるが、先生方がどうもスマートすぎるような気がする。時代が変わっても、いつの時代も子どもたちは、教師に対して、いつも素敵な先生であって欲しい。遅く、そして、やさしい先生であって欲しいと心の中で思っている。「あの先生は怖いけど、本当は自分たちのことを思ってくれている。」など、心の信頼関係を築き上げるためにも、新任者をすぐに現場に配置せず、2年間程度をインターン期間とし、子どもの考え方、家庭の考え方を泥まみれになって体得する期間とすることを提案したい。子どもを知るカリキュラムが必要であり、特に、新任教員の殆どが、自分の子どもを持たない独身者であることを考慮すれば、なおさらである。



# 外国人から見た日本の子どもたち

中国・山西大学日本語日本文学科長

張 麟 声

- 1 無形教育の欠落  
学校での教育を有形教育とすれば、村や部落の教育は無形教育といえる。新興住宅地では、地縁・血縁の無い人、お互い知らない間柄の人々で生活空間が作られている。日本の小中学校では中国より熱心に「心の教育」をやっているが、無形教育が欠落している。
- 2 先生は両親のような存在であるべき  
中国の先生はよく生徒を叱る。体罰もある。しかし保護者は、先生は両親のような存在だから、生徒を叱るのはあたりまえだと理解している。日本では、先生が強く叱ると保護者が反感を持つ。
- 3 人物像を教えよ  
日本では「民主」とか「平等」とかの教育をしているが、「民主」「平等」という言葉が抽象的である。「社会的ルール」という言葉も抽象的である。抽象的すぎると子どもの心に残らない。身近なモデルとなるようなものを伴う教育をしなければならない。子どもは誰かの影響を受けて成長する。中国では模範となる人物を教える。老人に席を譲るとかいった日頃の小さなことから教えるべきである。
- 4 子どものための伝記  
子どものための偉人の伝記、子どもがその世界に入っていけるような伝記が少ない。子どものマンガ、アニメは空想人物だけである。ヒーローは実在しないことになる。子ども向けの書籍は、「自由」だけでなく社会の「良識」を教えられるものがよい。
- 5 人間関係の希薄化  
しつけは学校だけがやるものではない。親と協力して行うもの。日本では大人が近所の子を叱ったりすることはない。人間関係が希薄になっている。親と子ども間の関係も希薄になっている。特に父親の帰宅時間が遅い。日本では40～50歳代の父親が、子どもとどれだけの時間一緒にいられるのか。両親は計画してしつけるのではない。子どもと一緒にいて、子どもの行動を見て叱ったりするのである。
- 6 「羞恥」の民族性  
近代化は常に人間疎外を伴う。それがその国の民族性と結びつく特殊な事情が生まれる。日本民族は人前で話ができないほど羞恥心が強い。日本人が集団を作るのは、他人と自由に付き合っていける性質でないからである。特定の人と組んで生きる民族だから縄張りや友達を大事にする。ところが、14歳の少年は仲間との精神的つながりがなかった。自分自身の内部へ内部へと向かっていった。人間同士の付き合いのなかで喜びを見いだせなかった。いじめ問題や殺人を考える上でこの視点は必要である。報道はこの民族性を見ていない。
- 7 日本の子どもたち  
日本の中学生は、社会的良識を持つか持たないかという点から見ると子どもであるが、知識（特に自然科学に関する）レベルは従来の子どもの親を覆すものである。趣味も固まらないうちからいろいろな知識を手に入れている。また、日本の子どもたちは孤立している。民族性が加わった孤独だ。学校ではなるべく子どもたちと話す時間、授業ではなく工作などの時間、お互いがうちとけ合う時間が考えられたら、子どもたちの孤独感をなくすことができるかもしれない。

# 戦後の教育の中で目を向けられなかったもの

イラストレーター 永田 萌

## 1 今回の須磨の事件について

あくまでも特異な事例で、彼の内面世界に要因があると思われる。子ども社会全般の問題として捉えると足元をすくわれるが、こういう子どもは1人ではなく、同様の事件が広がるきっかけになりうるので、丹念に調べて、防ぐ手だてを考える必要がある。

子育てについて、親に責任があるのは当然のことであり、地域や学校などに責任を転嫁してはいけない。親は特別な存在であり、運命から課された責任を負うべきである。子どもの精神面での成長の上で、親や、それに近い存在の人の手助けが必要である。

## 2 戦後の教育の中で目を向けられなかったものについて

親の世代に問題があり、それは戦後の教育の責任である。私たちの時代は、自然に対する畏敬の念などの原始的な信仰心があったが、戦後の教育の中で、目に見えない大切なものがあることを教えなかった。広い意味での宗教観を切り捨ててしまったので、呪術的なもの、魔術的なものが心の空白を埋めているのではないか。

芸術は、目に見えないものを対象としており、見えないものをどうやって見るかという想像力を養う。目に見えるものばかり見ていると想像力が養われず、感動がない。

やさしさも見えないが、やさしさをどう育てるかは大人全体がやらなければならないことである。大人が変わらなければ子どもも変わらない。赤ちゃんは純粋無垢であり、悪くなるとすれば、いいものを育てようとしなかった周りの責任である。

## 3 人生の幸せと不登校について

人生は生き生きと楽しいことが理想である。本当の幸せは何かということを実現している人の存在を子どもたちに教えることはできないか。

不登校の子どもは必ずしも悪いことではない。学校に代わるべきものを見つけられた子どもの中には、伸びやかな世界に旅立っている子どももいる。

大人の価値観も変わってきており、親はこれまでは学校へ行かなくてはならないと考えてきたが、もっと他の幸せもあることを知ることになった。

学校に代わるものを見つけることは大変であるが、子どもが自分で見つけて責任を取ることが大切である。そのためには、大人の忍耐が必要となる。

先生や師といえる人を持つことは人生の財産であることを教えてやりたい。また、学校へ行かなければ得られないものもあることも教えてやりたい。

## 4 親の姿勢について

親が子どものお手本である。親は子どもと一緒に本を読むべきであり、感動した本や音楽を子どもに示し、感動を伝えることも大切である。また、親の学ぶ姿を子どもに見せることも必要である。子どもに教訓を垂れたり、子どもの世界に入り込もうとするのではなく、喜びを共有することが大切である。

社会のルールは、小さい時に徹底的にたたき込まないといけない。親が手本を示さないと子どもに伝わらない。親だけでなく、他の大人の手助けが必要である。

## 5 今後の教育の在り方について

今後は、内なる精神力を鍛えるだけでなく、教育や社会の仕組みを変えるべきである。親と子が、幸せとは何か、よりよい人生とは何かをさがす時代である。何か熱中できるもの、没頭できるものがあればよい。

よい学校に行けなければよい人生が送れないと思っている子どもが多いが、人生にはいろんな選択があることを教えてやりたい。そのためには、いろんな個性を持った大人との交流が必要である。違う環境にある家庭にホームステイするのもいいのではないか。

かつて切り捨てたことを思い出して教育することも大切である。そうすれば、新しい家族や社会の在り方を見つけることができるかもしれない。

# 情報化新時代と子どもたち

株式会社アスキー取締役社長 西 和彦

## 1 情報化社会の光と影

光と影はワンセットである。光が明るければ明るいほど、影は濃くなる。インターネットの普及により世界的な距離、時間の観念が変化してくる一方で、文字のコミュニケーションが増え、対話・感情の部分が減少する。また、暴力的なゲームの流行により、仮想と現実のバランスが崩れ、すぐ怒ったり、すぐ手をだす子どもたちを創りだし、社会から連帯感、協調性を喪失させる。

## 2 ボランティアと存在感

大都会においては、個人と社会の関係が切れ、社会の一員として存在感は皆無である。青少年期から、ボランティア経験を積むことにより社会貢献の意義を認識させ、自己実現を目指すことは、重要である。学校教育においても、ボランティアを必須科目とし、社会と個人との関係を実践的に体験すべきである。

## 3 「思考」から「感性」へ

「ガンバレ、ガンバレ」と子どもにプレッシャーを与えることは、長期的な観点から見ると無意味である。させられているという義務感の中から、成長は生まれない。子どもは今本当にやりたい事しかないものである。心がポジティブ思考になることが、結果的には個人の心に安らぎを持たせ、真の成長を促す。

これからは、「努力」する子どもより「情熱」を持ちつづける子どもを育てていくべきである。

## 4 職業に対する早期認識を

日本の大学生の職業意識は、世界的に見ても非常に低い。ところが、将来の仕事に対する質問について、サラリーマンと答える子どもはいない。つまり、小・中・高と進む中で、将来の職業に対する意識が薄れ、受験勉強に埋没してしまっているのだ。そこで、あえて、中学校2年生の時点で職業を選択する制度を提唱したい。幼稚園3年、小中学校あわせて8年終了後に、各々の分野別の5年の専門学校に進み、社会に出る仕組みである。子どものうちに、責任感と専門性という目的意識を持たさなければ、日本の将来が危ないと言っても過言でない。

## 5 得意とするところを育てる

個性化、多様化が叫ばれている時代において、学校教育のみが旧態然として変わらずに取り残されている。音楽、サッカー、科学等本人の得意分野別のカリキュラム設定を可能にするべきである。また、茶髪、携帯電話等の外面的側面で子どもを規制することも無意味である。

得意とすることをやると時間は短く感じられ、ストレス社会の一つの救済にもなる。また、心に余裕ができ、人の気持ちや物事の本質を把握することができる子どもを育て、社会にとっても大きなプラスになるだろう。

# 子どもの現状と子どもをとりまく社会の問題点

兵庫県子ども会連合協議会事務局長  
速見 順一郎

## 1 子どもの良さ

キャンプ等で子どもたちを見ていると環境に対する順応力は早いと思う。自分たち自身で工夫しながら充分に楽しんでおり、特に冒険体験を行った時など、お互いの体験を夜遅くまで語り明かすほどわくわくしている。

また、子どもはリズムに対する感性はすごい。さらにニューメディア等の機器もすぐに使いこなす。

今の子どもは創造力が乏しいと言われたり、工夫する力や思いやる心に欠け、感動が少ないと言われるが、親たちが先走りしてその芽を摘み取っている。また、子どもは規格外のことはしないと言われるが、その機会を与えていないのではないか。

トータルで言えば、実体験が少ないのが課題である。様々な直接体験の場をもてば、身につくことがもっとたくさんあるはずである。

## 2 情報に対する判断力を

あふれる情報によって子どもは影響を受けている。情報はマスメディア等を通じて得るので結果が先に見えてしまい、夢が持てなくなってしまう。これは、子どもの遊びにも影響し、ペットを育てるゲームで象徴されるように死んでもボタンを押せば生き返るもので遊んだりしている。人をいじめて喜んでいるようなテレビ番組を見ていれば影響を受けるのはあたりまえだ。

また、パソコン等の普及により情報化社会が進むと、離れていても容易に情報交換ができるようになる。だからこそ、生のコミュニケーションが図れる人間関係がますます求められ、氾濫する情報に対して各自が判断できる力を培うことも大事になる。

## 3 ゆとりある学校教育に

学校が忙しすぎる。家庭と学校の役割を明確にすべきだ。子どもが家に帰った後は家庭が責任を持って子どもを育てることをはっきり言うべきだ。学校外の様々な用件まで学校に求め過ぎている。

学校も運営のスリム化に取り組み、先生同士のコミュニケーションの場や先生が休憩時間や放課後に子どもと接する時間を増やすべきだ。

また、中学生や高校生が忙しすぎる。特に中学生は部活と勉強に追われている。高校の入試制度を考え、将来学びたいことや中学で出来なかったことを高校で実現させるために、進学する意味を中学生が自覚し、目標を持つゆとりが必要である。

将来どんな人になるかは、幼小中高期で人生の6割が決まると言われる。その時期にどのような体験が出来たが大切であり、学校教育の中でも体験をもっと重視すべきである。

## 4 親の考えを子どもに押しつけない

自分でしたいことを自分で考えて決めたり、自分で自分の人生を決めるのは大事なことである。ところが迷ったときに親に相談することがあるだろうか。また、親はアドバイスを求められた時、子どもと一緒に考えることが出来るだろうか。家庭内でもコミュニケーションが不足している今、とても難しいことである。親子のコミュニケーションは、子どもの小さいころから大切にしたい。子どもが話しかけてきた時、いつでも子どもの方を向くことが出来、目線を合わすことから始まる。家庭団欒の時間をテレビに横取りされたり、車で遠出をして商業レジャー施設で過ごすのではなく、休日を家族とゆったりと過ごしたり、また、会話がはずむゆとりを持つことが大切なことだ。そうすれば、子どもの願いと親の願いのずれ違いや、子どもの考えを無視した子育ては少なくなると思う。

## 5 地域活動の活性化をはかる

異年齢の仲間遊びの中で子どもは育つ。地域の人々との触れ合いの中で生き方を学ぶ。そのためには地域社会や活動のあり方を見直し、組織や活動のモデルチェンジを行うことが大切だ。そこで、コミュニティーコーディネーターを育成する。コーディネーターは旧来の地縁・血縁ではなかなか対応が難しい新しい組織作りを、活動を通してつくる。コーディネーターのもとに、子どもたちを対象に遊びや仲間づくりを進めるプレイリーダー、福祉の視点で地域の活動を展開するソーシャルリーダー、地域の様々な団体との連携や人材を生かすジョイントリーダーが一体となって活動に取り組む。地域の人々が自分の持ち味を生かして地域に係わっていく活動拠点を作っていくことが必要だ。今後、地域活動において、子どもに視点を置いた少年団体が大きな役割をになうだろう。

# 時代が求める教育の創造

お茶の水女子大学名誉教授 森 隆夫

## 1 知・徳・体のバランス

教育は、子どもが自立するためのものであるべきで、利便性を追求する文明は、教育の敵とも言える。便利に慣れると、無意識のうちに依存心が心を支配し、管理し、人間の自立を妨げるのである。大人自身がすでに依存体質にどっぷりと浸っている「大人の幼児化現象」の実態において、教育の世界は抜本的な意識改革を求められている。一度崩れたバランスを修正するには、大人も子どもも巻き込んだショック療法が必要であるように思う。

## 2 心の複合汚染

今回の事件は、例外的なものではなく、これから起きる危険の先行指摘のように思える。豊かな時代の教育と、耐性の低下を前提において3つの課題を考えたい。

### (1) お金と心のアンバランス

ユダヤ人の諺に「金持ちの家に子どもはいない。いるのは相続人だけだ。」とあるが、子どもに財産を残すためのみにエネルギーを使っている両親は、子どもにとって今なにが大事なのかを考えてほしい。

### (2) 肉体的成熟と精神的未成熟のアンバランス

思春期の子どもに限ったことでなく、例えば老人になっても精神的に成熟するものとは限らない。人間は一生この葛藤に苦しむものだとして認識すべきである。ワーズワスの言葉「暮らしは低く、思いは高く。」のような謙虚さを知るべきである。

### (3) ハイテクとハイタッチのアンバランス

技術の進歩に心の進歩がついて行かず、機械の親切さが、人間をますます不親切にさせていくように感じる。あなたは、喋るCD機に相槌を打っている人を見たことがあるか。

## 3 家庭は心の庭

教育の原点は家庭教育にあるのだが、その是非を問う以前に家庭そのものが今存在しないとされている。家庭の団欒こそが、人の心に安らぎを与える心の庭であるはずである。そこには、笑いとりとめのない会話があり、家族と一緒に「With」の精神を無意識に育む絶好の場所である。現代社会において、時間的制約が絡んでくるのは分かるが、真の心の教育がしたいなら、まず大人はライフスタイルを変えて、家族の時間を作ることから取りかかるべきである。

## 4 心の教育の基礎

### (1) ストレスの解消

豊かな社会になり、あらゆるものが巷に氾濫し、大人と同様に子ども社会もまた、ストレス過多の状況にある。先ずこのストレスを除去せずに上からいくら立派な教育を詰め込んでも吸収できる筈はない。大人が飲酒したりして上手に発散させている術をシンボル操作により子どもたちにも提供すべきである。つまり、大人の遊び場所のようなものを否定しては子どもは窒息するだけである。

### (2) 感動と感化

親の背中を見て子どもは育つと言うが、親も教師も毎日全力投球で懸命に生きているからこそできる背中の教育を提唱したい。それも、なるべく早い時期に子どもたちの潜在記憶に好影響を与えうるイメージトレーニングが望ましい。恣意的に感動をつくり出すことは可能だが、将来に影響を与える感化の状態はつくり出せるものではない。

大人と子どもが共に感動の涙を出しながら、直接体験に日々取り組む事が肝要であると考える。「石鹼は身体のために、涙は心のために。」

# 現在の子どもたちを理解するための視点

関西学院大学教授 横山 利弘

- 1 今回の須磨の事件について  
行政として、今回の事件が一つの警鐘を鳴らしているという受け止め方をすることは必要であるが、一般の教員が警鐘として受け止めているかどうかが問題である。  
これまで行政として必要な手だては取ってきたが、その手だてが家庭や学校まで下りていないという共通の問題がある。また、小学校と中学校の連携がどうであったのか、家庭と小学校、中学校との連携の一貫性がとれていたのかどうか問題である。
- 2 研修の充実について  
教員の研修が必要となるが、兵庫県は、研修の回数が他府県よりも少ない。研修を行う場合、その中身を考えていかなければならない。子どもの心を見る目について、教員の間の差が大きくなりすぎている。一般論で総論的な研修では駄目で、具体的な事例を取り上げることが大切である。具体的な事例をもとにして、自分がその立場になったらどうするか、どこに問題があったかなどを考えさせることによって、子どもの心の変化、ものの考え方、態度、行動が具体的に浮かび上がってくる。  
保護者と教員と一緒に研修を受ける機会を持つことも大切であり、事例にもとづいたものであれば、お互いの苦労や悩みが分かりあえる。
- 3 心の教育について  
心の教育は、全ての場面の中で行われなければならない、教科の指導の中でも行われる必要がある。道徳の時間という形にとられることなく、心を育てる教育をしていく必要がある。  
分からないことを分かったことにしている子どもを見過ごしている教師が多い。子どもが分からないということを態度で示しているのに、教師が子どもの心を見誤ると、子どもは教師が何もしてくれないと思う。子どもは誰かと心を通わせたいと思っている。そこで、子どもの心を見る力や子どもと心を通わせる方法を教師が身に付けなければならない。子どもと心を通わせることができる教師が学校改革に必要である。
- 4 社会のルールを大切にすることを育むことについて  
社会のルールについては、家庭では守っていないことも多いので、その場で指導する必要がある。みんなを集めて言い聞かせることも大切であるが、抽象度の高い説明をする人が多い。小学生は聞くが、中学生や高校生になると聞かなくなる。  
子どもの言う通りにすることが子どもを理解することだと思っている親もいるが、ホラービデオのような極端なものは、家庭の中で親が取捨選択する必要がある。小さい時にきちんと教えていけば、正しく積み上げていける。  
中学校・高校はもう一度自分を作り直す時期である。この時期に今まで教えられたことをもとにして生き方を再構築していく。自分を再構築する時期に、社会のルールを大切にすることができていないと、再構築はうまくいかない。また、子どもが生き方をどう構築しているかを見る目が必要となる。
- 5 現在の子どもたちを理解するための新たな視点について  
社会の変化とともに、子どもがどう変わってきているかを理解する必要があるが、子どもたちを理解する力が弱くなっている。価値観は多様化したと言われるが、子どもを見る時は、「出来る子」「出来ない子」という見方一つになっている。  
子どもたちの中には変わらないものもあるので、変わっているものと変わっていないものの両面を見る必要がある。特に、変わらない部分は何かを問い直す必要がある。人間としてはそんなに変化していない。しかし、変化への対応も大切であり、行動の表面で変化している面を見ることも大事である。例えば、友達を大切にすることは変わらないが、手立てが分からない。そこで、子どもたちを見る目線やセンスが必要となる。子どもが再構築しているところを見て、「先生はちゃんと見ているよ」という関わりができればよい。変化している面にばかり目をやるとわけのわからないことになる。  
基本的倫理観の欠如については、昔と比べて罪悪感を感じない者が増えている。親の視野が狭くなっており、家庭では、勉強ばかりできっちりしつけられていない。

# スクールカウンセラーから見た 子どもたちの実態と問題点

【 開催目的 】 神戸市須磨区における事件等を踏まえて派遣したスクールカウンセラーの方々を中心に集まっていたいただき、「第1回心の教育緊急会議」として、児童生徒や教職員、保護者の実態や問題点等について協議する。

【 協議事項 】 スクールカウンセラーから見た、児童生徒や教職員の日常生活の実態と問題点

【 開催時期 】 平成9年8月2日

## 1 子供たちの実態

### (1) 親の前では「いい子」でいる子どもたち

親にいい子の面だけを見せて、恥ずかしい面、情けない面を知られたくないと思っている。いい子じゃない面を見せると、親から見放される、見捨てられるから言いたくないという。

また、既成の枠に（特に母親に）反発したいと思っているが、その反面、そういうことをしたら母親に悪いというアンビバレンツな感情がある。父親や母親に反発したい、「いい子」の枠を取りたい、けどできない、と悩んでいる。ただ、この枠は自分で作ったものだと思える健康な子もいる。

### (2) 感情表現が素直にできない不自由さ

子どもたちも大人も、先生方も、自分の思いを表現すること、特にネガティブな感情表現——相手に腹が立ったとかあんまり好きじゃないとか、断りの表現——などが不自由で、そのために人間関係が（親子関係も）気まずくなったり、息苦しくなったりして、自分自身の負担になっている。先生方の心のケアがいるように思う。

カウンセラーのところへ来るのは先生に勧められた場合が多いけれども、あまり話したくないと言っている、こっちが黙って待っていると、しだいにぼろぼろ話をしてくれる。1時間のつもりが2時間にもなることがある。

子どもたちもそうだが、先生、親、特にお母さんがあまりいきいきと生きている感じがしない。一所懸命頑張っているのは分かるが、ゆったりした感じとか、どこか抜けてる感じとかがなく、大変だなと思った。

### (3) 緊張感と恐怖感

カウンセラーの部屋に集団でやって来た生徒の中で、最後まで残った子が「不安で眠れない」と切実に訴えだした。家も学校もピリピリしていて先生や親に言えない、言ったらもっと母親を不安にさせるという。一般の生徒たちも、5月以降、先生が非常に忙しくなったので、「全然自分の意見を聞いてくれない」「押しつける」「無視する」という不満を持っている。子どもたちが本音を吐けず、潜在的に不安を抱えている。何か知らないけど不安になると訴える生徒もいる。

また、母親から子どもの、特に夜間の異常行動のことを聞いた。担任に伝えたところ、学校では異常なく、明るく元気にやっているという情報だった。また、この事件のあと、1日学校に行けない子がいたが、次の日には登校した。トイレに一人でいけなくなっている子どもや、大人がいるのにエレベーターに乗れない子ども、鍵を何度も確認する子どもがいる。



子どもたちのなかに、警察の捜査に協力したショックや負担がある。また、マスコミに対応した母親が、容疑者が中学生だとわかって、話したことと全然違っていたということで父親との仲が悪くなり、その余波が子どもにきている場合もある。

子どもたちがお互いに気をつかい合ってピリピリしている。お互いの人間関係がうまくいっていない。母親たちも気をつかい合っていて、非常に傷つきやすい。それで子どもたちの心も不安定になっている。

#### (4) 今回の事件に対する不登校児の反応

不登校生徒に感想を聞いたところ、「えぐいけどよくやったと思う」というような支持的反応、「少年法を改正して死刑にしまえ」という反応、もっとも多いのが「自分もそうなるんじゃないかと思って怖い」という反応であった。

#### (5) 今回の事件に対する保護者の反応

不登校だったり部屋に閉じこもっていたりすると、保護者には、自分の子がやってしまうのではないかという加害不安がある。また、近所の子どもたちもこんなことになるのではないかという不安をかなりもっている。

保護者は、おびえる子ではなくむしろ怖がらない子の方を心配している。また、非常に過敏になっていて、動物の死骸を見ただけで飛んでくる母親もいる。

多くの母親は、一人でわが子を守ろうとして、朝から学校の送り迎え、食事、おけいこの送り迎えなど休む暇がなく、心身とも限界がきている。震災は少しずつ回復するが、今度はいつ終わるか分からないという恐怖を話す人もいる。

#### (6) その他

- ・常に0か100か、全然ダメか全部いいかみたいなことを自分に課している。
- ・集団登校で自由にグループを作れないところもあって、最初はぎくしゃくして不満もあった。しかし、他学年との交流とか、保護者と生徒、保護者同士いろんな話ができるようになった。
- ・幼児期、小学校低学年までは行政の支援システムがあるが、思春期への支援組織はきわめて少ない。
- ・養護教諭が非常に適切に対応していた。
- ・従来のいわゆる教育的・指導的配慮だけでは解決できない生徒や問題が増えてきている。
- ・頑張り通させてリバウンドで何年もぼーっとしてしまうという相談があった。相談するというのは甘えるということだが、一歩退却してホッとする体験が教育のなかでも大事だ。

## 2 課題

- (1) 本音でつきあえる、闊達な人間関係（友人関係、親子関係、先生と生徒との関係）を築くにはどうすればよいか。いいところも悪いところも認め合うような学校や家庭環境を築くには、親や教師はどうあるべきか。
- (2) 十分に自己表現できない子どもたちに、どのような指導が適切か。
- (3) 不登校児の心のケア、保護者（特に母親）への心のケアはどのようにすべきか。
- (4) 頑張りつづけるのではなく、甘えたり、ホッとしたりすることも大切である。自立と依存をいかに共存させるか。
- (5) 思春期にある中学生に対する支援体制をどのようにすべきか。

# 心の教育に関する学校・家庭連絡会議

## 各部会のまとめ

【 開催目的 】 神戸市須磨区における児童生徒の生命に関わる事件等を踏まえて設置した「心の教育緊急会議」に資するため、教師と保護者が集まり、学校・家庭・地域社会における子どもたちの日常生活の実態や問題点等について協議する。

【 協議事項 】

- 1 学校・家庭・地域社会における子どもたちの日常生活の実態と問題点
- 2 教育施策の学校・家庭への浸透方策について

【 開催時期 】 平成9年7月～9月

## 1 学校・家庭・地域社会における子どもたちの日常生活の実態と問題点

### 幼稚園部会

#### 1 子どもたちの実態

##### (1) 自然体験の不足

最近、自然がそのままの形で残っているような遊び場が少なくなり、子どもたちは幼児期の自然体験が不十分なまま成長している。中には、幼稚園や保育所にきて初めて虫類を見たという子どももいる。高層マンション住宅が増え、小動物を飼うことのできない家庭は多いし、そこに住む子どもたちは、当然、戸外で遊ぶ機会が制限されている。子どもたちは家に籠もりがちで、テレビゲームやビデオを楽しむことが増えてきている。雨が降るとゲームができると言って喜ぶ子どももいる。

園児を連れて散歩に出ても、畦道を勝手に歩けないし、レンゲ摘みなども自由にできないという状況がある。

##### (2) 過保護・過干渉による弊害

4歳入園時になっても、靴を脱いでもはけない子ども、大小便ができず立ったままの子どもがいる。原因は、子どもが自分で始末できるまで待てず、親がつい手を出してしまうからである。園児のなかには、衣服の汚れるのを気にして「どろ遊び」や「水遊び」を嫌がる子がいる。理由は、迎えにきた親が衣類の汚れているのを見てがっかりした顔をするのを、子どもが知っているからである。

習い事などで、子どもたちが自由に遊ぶ時間も区切られてしまっている。友だちは「遊ぼう」といって誘うのではなく、「遊べる？」と誘う。籠のなかの鳥のような状況である。

##### (3) 大人型生活

昔の親たちは、子どもの生活時間帯と大人の生活時間帯をはっきりと分けていた。それが大切な「しつけ」だった。現在では、親たちの生活環境も変わったせいか、子どもたちは夜の10時～11時ごろまでも起きている。9時ごろまで家族とテレビを見て、そのあとで風呂に入ったりするので就寝時間が遅くなるようである。10時～11時に子ども連れで歩いている家族を見かけることもある。

##### (4) 母親とのつながり

母親が家にいないと分かっている園児が、園で一日中元気のないことがある。手作りのお弁当を見て、母親を思い出泣きだす子どもがいる。このような子供たちを見るにつけ、母親と子どもとの心の結びつきは大変強いものだと考えさせられる。しかし一方で、弁当はコンビニエンスストアのもので済ませ、水筒の代わりにペットボトルを持たせる保護者もいる。こんな親に育てられたら、子どもは親の愛情を感じられないまま成長していくのではないかと思う。

#### 2 問題点

- (1) 自然と触れ合い、生き物に直接触れることが生命を理解することになる。幼児期から身近にそのような体験ができる機会を設けることはできないか。
- (2) 子ども自身が身の回りのことなどを自分でできるようになるまで、ゆったりと待てるようなゆとりある子育ては、どのようにすれば実現できるだろうか。
- (3) 子どもとの心の触れ合いやスキンシップが保たれているか。子どもが愛されているという実感を持てるよう、どのように接したらいいか。
- (4) 家庭においてしつけはできているか。善悪をきちんと教えているか。

## 小学校部会

### 1 子どもたちの実態

#### (1) 変わりゆく「遊び」

子どもたちの「生きる力」は遊びの過程で育っていくものだが、現代の子どもたちは塾通いのため、遊びに深入りできず、断片的な遊び方しかできない。日暮れまで、夕食の時間も忘れて遊ぶことはまれである。また、集団で遊ぶ場所がなくなって、個人遊びになりがちであるし、室内遊びを好む傾向がある。山や川へなどの自然のなかで遊んでいない。

昔の子どもの遊びにはスリルに挑戦する冒険心があった。今の子どもたちも工夫を好み、遊びながら創造していくところは同じだ。勝ち負けがある遊びだと、自分たちでルールを作って、長い時間やっている。自由に野球をさせると、朝から夕方までやっている。しかし、花火など、危険な遊び、騒がしい遊びは親や地域が許してくれないという実態がある。

#### (2) 体力の低下

学校では、朝会で立っていることに我慢できず、すぐに座り込む児童が多い。体力をつけるために長い距離を歩く遠足が少なくなり、社会見学が増えてきている。実際、長く歩く遠足には、救急のための車両が必要だし、保護者から抗議がくることもある。それで、計画段階から止めておこうということになり、学校も子どもたちを鍛える機会を逃している。

#### (3) 中学生との交流

異年齢集団との遊びが少なくなっているなかで、地域の小学生と中学生との合同の活動が見直されるべきではないか。神戸市では、小中学校相互参観や合同の清掃活動をやっている。子供会のソフトボールチームへ中学生が指導に来てくれているところもある。いずれにせよ、小中学校の垣根を低くする必要がある。

#### (4) 情報化の進展につれて

子どもたちは居ながらにして、まわりからいろいろな情報を得て、時間を過ごせる状況にあるが、それら刺激の多い情報を上手に消化できずに、情報に振り回されている子どもたちもいる。

#### (5) けんかをしない子どもたち

子どもたちはもの分りがよく、子どもたち同士でけんかをほとんどしなくなったが、無視や関わらない態度をとる。また「むかつく」「ごうがわく」「きれた」などの言葉で、感情表現する子どもが増えている。

### 2 問題点

- (1) 子どもたちは家庭、学校、地域で、子どもたちにふさわしい遊びをしているか。家庭、学校、地域は、子どもたちが遊ぶのにふさわしい環境にあるか。
- (2) 子どもたちに干渉しすぎるあまり、精神的にも肉体的にもひ弱な小学生を育てていないか。
- (3) 子どもたちには、成長段階を踏まえて様々な経験をさせるべきところを、先にものを与えすぎて、子どもたちの感動や創造力の芽を摘み取ってはいないか。
- (4) 親は子どもたちの逸脱した行動の抑止力となっているか。子どもと話し合い、正しいこと、間違ったことを納得させているか。

## 中 学 校 部 会

### 1 子どもたちの実態

#### (1) ストレス感

子どもが清掃の時間に奇声を発したり、消毒液を血に見たててあたりに撒いたりしたことがあった。原因は、クラブでいじめを受けていたことと、家庭から過剰な期待をかけられていたことだった。一般に今の中学生は、自分の思いをうまく言葉で表現できず、外に向かって発散することもできない苛立ちから、ストレスをため込んでいるようである。大人から干渉されすぎて、いつも誰かに監視されているような気がするという生徒の声は実際にある。部活動や塾に追いまくられ、睡眠不足の生徒もいて、朝から「しんどい」「寝かせて」と保健室に駆け込んでくる状況がある。さらに、高等学校が単独選抜の地域では、高校入試が常に生徒の頭を離れず、ストレスが強まる傾向があるようである。心から信頼できる友人を持ってなくて、悩みを打ち明けあうなどということができない生徒もいる。

#### (2) 体験による感動

今の子どもたちは疑似体験は豊富だが、直接体験が少なくなっている。家庭内でも特に重要な役割が与えられておらず、生活体験が不足している。小学生には子供会など地域の活動があるが、中学生になると地域で活動する場が無くなってしまい、地域から浮いてしまっている。そこで地域が行事を計画し、中学生の参加を呼びかけても、部活動の練習等でほとんど参加者がいないという悪循環になっている。

しかし一方では、老人ホーム等でのボランティア活動体験に取り組む学校が少しずつ増え、成果をあげている。修学旅行も、観光旅行ではなく、勤労体験・社会体験などの直接体験を重視する傾向が強くなってきている。障害児の行事に参加している中高生、老人ホームでボランティア活動をおこなっている中高生の活動の様子は素晴らしく、生徒たちにとっても貴重な経験となっている。

#### (3) 家庭教育の難しさ

PTAがアンケートを取ったところ、子どもと親との対話時間が30分以内の家庭が80%をこえた。子どもが中学生ともなると、共通の話題が少なくなり、家庭内での人間関係も希薄になりがちである。昔は子どもたちの方が親の顔色をうかがいながら行動したのだが、今は、中学生がデリケートな年齢ということもあって、親の方が子どもの顔色や機嫌をうかがって接しているように思われる。実際の子育ては母親任せの家庭が多く、父親の子育ては観念的なものになってしまっている。

### 2 問題点

- (1) 中学生の学校生活や家庭生活に、ゆとりある時間をどのようにして作りだせばよいか。
- (2) 豊かな自然体験、生活体験、福祉体験等ができる機会をどのように作ればよいか。
- (3) 思春期にある中学生を支援するために、地域や行政はどのような対策を立てればよいか。
- (4) 子どもたちの自我の成長を促すためにも、表現力をどう育てればよいか。

## 高 校 部 会

### 1 子どもたちの実態

#### (1) 存在感の確認

大人の側から、最近の高校生はとらえにくくなっている、見えにくくなっているという指摘がある一方で、高校生自身は自己の存在を認めてもらえないという寂しさを感じているようである。高校生ともなると、校区も広がり、近隣に親しい友だちがいるとは限らない。ポケベルや携帯電話を用い、友人とつながっていることを確かめることで、自己の存在を辛うじて支えているのではないか。プリクラの流行もこのことと無関係ではない。不登校の生徒も、プリクラはたくさん集めている。核家族化が進み、家族団欒の時間が持てず、家庭内での対話も減る傾向にある。そのようななかでも、子どもたちは、自分が家族や他者から愛されている、信頼されていると実感できることを求めているし、実感できることが力になる。

#### (2) 個性を認める教育

不登校生徒は増えつつある。偏差値教育にも問題があるが、保護者の大半が偏差値を是認していることに、より大きな問題がある。親の教育的期待の大きい「よい子」が、突然学校に行かなくなることもある。「親のために勉強するのがいやになった」と言って学校に来なくなった生徒もいる。学校は個性を生かす教育を推進すべきである。しかし現状では、一人一人の個性を引き出し、伸ばすようなきめ細かで柔軟なカリキュラムの設定は難しい。せめて、授業のなかで、生徒一人一人が自己表現でき、存在をアピールできるような工夫が必要である。

#### (3) 学校行事の変質

高校生は、文化祭や体育祭など、自分たちで計画し作り上げた行事にはすごく熱中する。しかし、体育祭で危険を伴う競技（騎馬戦や棒倒し、組体操など）を割愛したり、競争競技を少なくする風潮があり、若者のエネルギーが健康的に発散されていない。野外活動が学習合宿に変わる学校が増えているのも同じ流れである。

#### (4) PTAや地域との交流・障害児学校との交流

高校は校区が広範で地域に根づくことが難しいが、文化祭や体育祭などの学校行事へ地域の方々を招いたり、「いきいきハイスクール推進事業」のクリーン作戦などを活用することで地域との交流を図るべきである。地域の養護学校との交流を通して、生徒や教師が貴重な経験と感動を得ている例も多い。

### 2 問題点

- (1) 高校時代は「自分さがし」の時代である。子どもたちが、心ゆたかで健全な個性を確立していくまでの過程を、家庭や地域はどのように支援していけばよいか。
- (2) 生徒の進路目標はどのように立てさせればよいか。偏差値だけで進路を決めていないか。
- (3) 「学校が面白くない」原因に、生徒が中心となって作り上げる行事が少なくなったことがあるのではないか。見た目や成果を重視するあまり、画一的で無難な計画に偏っていないか。

## 2 教育施策の学校・家庭への浸透方策について

	問 題 点	浸 透 方 策
幼稚園部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・通知などの文章だけでは、読んで終わり埋没してしまう。</li> <li>・冊子を作るが、冊子ができるとそれで終わってしまう。便りや手紙を読まない。</li> <li>・便りや手紙を読まない保護者がいる。</li> <li>・上からの一方的なものは伝わりにくい。</li> <li>・PTAといってもPとTが別々にやっている。</li> <li>・毎日、保護者と先生は会っているが、お互いなかなか声かけられない。</li> <li>・教育講演会など、PTA役員しか集まらない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国や県の施策を職員、PTAで少人数で話し合う。</li> <li>・先生が地域に出かけていき、理解を得る。</li> <li>・通達一本より、まず行動が大切で、繰り返しやっていく努力がある。</li> <li>・子どもにも分かるようなビデオや映画を作成し、それらを活用して話し合う。</li> <li>・テレビ放映などで啓発していく。</li> <li>・ポスター、標語などを公共の場に掲示し、地域に広めていく。</li> </ul>
小学校部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師は保護者を気にして教育をしているが、親が何を期待しているか分からないところがある。</li> <li>・保護者は学校に任せると言いながらも、必ずしもそうではなく連携が不安定な状況にある。</li> <li>・懇談会等の学校行事に父親の参加が少ない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケートなど、事務的、機械的にするのではなく、教育活動に積極的に活かしていくことが大切である。</li> <li>・保護者向けの冊子を作る。</li> <li>・学校の通信文や連絡帳でコミュニケーションを密にする。</li> <li>・父親、祖父母さらには地域住民も含めた懇談会を実施する。</li> </ul>
中学校部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一片の紙切れだけでは浸透しない。</li> <li>・親同士が本音で話し合える場が少ない。</li> <li>・学校と親のコミュニケーションの場が少ない。懇談会の出席が少なくなってきた。</li> <li>・面接週間に父親が出てきにくい。</li> <li>・「父母と教師の語る会」を土曜に開催しているが、父親の参加は少ない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校、家庭からの意見を吸い上げるようなシステムが必要である。</li> <li>・シンポジウムの開催やテレビ放映を通じて啓発する。</li> <li>・学校も問題を隠さず地域社会に公開する。</li> <li>・地域が学校を支援していくような方策が必要である。</li> </ul>
高校部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・広報誌は読まれているが、プリント類は読まれない。</li> <li>・生徒が主体的に取り組む行事が少なく、親が学校に足を運ばない。</li> <li>・保護者懇談会を平日実施しているが、休日実施の希望もある。</li> <li>・学校と保護者、地域との交流を目的とした行事の予算が乏しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三者の話し合いの場を学校、地域、県で積極的に設けていく。</li> <li>・四者懇談（生徒会、先生、保護者、地域）の実施を実施する。</li> <li>・シンポジウムのものを企画する。</li> <li>・「指導の重点」ダイジェスト版などで家庭や地域社会に理解と協力を求めていく。</li> <li>・県の施策ビデオ、モデル校の様子が分かるビデオを制作し啓発していく。</li> <li>・学校紹介ビデオを各学校で制作し、啓発する。</li> <li>・先生が家庭訪問して、子供の机の横で三者懇談をする。</li> </ul>



# 子どもたちの人権意識等に関する アンケート調査結果

## 人権教育研究校会議

【 調査目的 】 兵庫県における人権教育基本方針の策定に資するとともに、当面する心の教育の充実を期するため、児童生徒の人権意識や生命の尊厳の理解等の現状を把握する。（※ここでは一部を抜粋して掲載した）

【 調査対象 】

	調査校数	児童生徒数
小学校 3 年生	11校	1,074人
小学校 6 年生		1,164人
中学校 2 年生	8校	1,444人
高等学校 2 年生	3校	891人
合 計	22校	4,573人

【 調査時期 】 平成9年7月中旬

■質問1 あなたは次のことについて、どう思いますか。(%)

ア、死ぬことはこわい

[学年別]

選 択 肢		小学3年	小学6年	中学2年	高校2年
1	とてもそう思う	82.7	64.0	48.2	42.3
2	まあまあそう思う	9.3	22.2	30.3	33.8
3	あまりそう思わない	4.2	9.2	15.4	17.7
4	まったくそう思わない	3.8	4.6	6.1	6.2

[男女別]

	小学3年生		小学6年生		中学2年生		高校2年生	
	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子
1	77.9	88.3	58.2	70.2	45.1	51.5	38.5	46.9
2	10.7	7.7	24.3	20.0	32.0	28.5	32.0	36.0
3	6.1	2.0	10.6	7.7	16.1	14.6	20.3	14.5
4	5.3	2.0	6.9	2.1	6.8	5.4	9.2	2.6

イ、生きてることはすばらしい

[学年別]

選 択 肢		小学3年	小学6年	中学2年	高校2年
1	とてもそう思う	79.0	66.2	44.8	40.2
2	まあまあそう思う	16.6	26.9	37.6	42.2
3	あまりそう思わない	2.8	4.9	13.6	13.7
4	まったくそう思わない	1.6	2.0	4.0	3.9

[男女別]

	小学3年生		小学6年生		中学2年生		高校2年生	
	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子
1	77.2	81.1	66.8	65.5	45.1	44.5	39.8	40.7
2	17.6	15.4	25.4	28.5	38.0	37.2	37.7	47.7
3	3.3	2.2	5.0	4.9	12.6	14.6	17.1	9.6
4	1.9	1.3	2.8	1.1	4.3	3.7	5.4	2.0

ウ、どんなことがあっても自殺はよくない

[学年別]

選 択 肢		小学3年	小学6年	中学2年	高校2年
1	とてもそう思う	89.7	83.4	61.2	64.0
2	まあまあそう思う	4.7	12.5	23.7	19.4
3	あまりそう思わない	2.1	2.8	11.5	12.1
4	まったくそう思わない	3.5	1.3	3.6	4.5

〔男女別〕

	小学3年生		小学6年生		中学2年生		高校2年生	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1	87.4	92.3	82.3	84.3	62.4	59.8	64.8	63.1
2	5.8	3.5	12.3	12.8	23.0	24.6	15.4	24.3
3	2.9	1.1	3.4	2.3	10.5	12.5	13.3	10.6
4	3.9	3.1	2.0	0.6	4.1	3.1	6.5	2.0

■質問2 友だち付き合いに関することを聞きます。(%)

ア、あなたは、何でも話せる友だちがいますか

〔学年別〕

選 択 肢		小学3年	小学6年	中学2年	高校2年
1	はい	71.0	69.0	65.8	69.7
2	いいえ	10.8	11.6	9.5	7.9
3	よくわからない	18.2	19.4	24.7	22.4

〔男女別〕

	小学3年		小学6年		中学2年		高校2年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1	69.7	72.5	63.3	75.2	59.5	72.1	65.5	74.8
2	12.4	9.0	14.7	8.3	9.2	9.9	9.2	6.3
3	17.9	18.5	22.0	16.5	31.3	18.0	25.3	18.9

イ、友だちとの付き合いが、めんどくさいと感じることがありますか

〔学年別〕

選 択 肢		小学3年	小学6年	中学2年	高校2年
1	はい	12.2	16.4	26.8	39.4
2	いいえ	76.1	70.5	52.8	43.8
3	よくわからない	11.7	13.1	20.4	16.8

〔男女別〕

	小学3年		小学6年		中学2年		高校2年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1	12.7	11.6	16.5	16.2	23.5	30.1	34.2	45.7
2	75.9	76.3	73.0	67.8	57.0	48.7	50.8	35.4
3	11.4	12.1	10.5	16.0	19.5	21.2	15.0	18.9

ウ、気の合わない人とも、話をすることができますか

〔学年別〕

選 択 肢	小学3年	小学6年	中学2年	高校2年
1 はい	62.5	63.0	52.4	60.6
2 いいえ	17.8	13.0	17.4	18.1
3 よくわからない	19.7	24.0	30.2	21.3

〔男女別〕

	小学3年		小学6年		中学2年		高校2年	
	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子
1	64.6	60.2	59.2	67.2	45.9	59.1	57.3	64.8
2	17.9	17.7	13.4	12.5	21.5	13.1	20.6	14.9
3	17.5	22.1	27.4	20.3	32.6	27.8	22.1	20.3

■質問3 あなたにとって、最もいごちがいいのは、どこで誰といるときですか。(%)

〔学年別〕

選 択 肢	小学3年	小学6年	中学2年	高校2年
1 家で一人になるとき	4.4	7.1	23.0	27.7
2 家で家族といるとき	54.8	45.0	17.9	13.8
3 家で友だちといるとき	13.5	10.0	5.7	5.8
4 学校で一人になるとき	1.4	0.3	2.3	0.6
5 学校で友だちといるとき	10.9	17.5	17.2	17.7
6 外で一人になるとき	1.8	0.9	2.6	2.8
7 外で友だちといるとき	9.3	15.2	23.4	26.9
8 その他	2.3	2.4	3.7	3.0
9 いごちのいいところはない	1.6	1.6	4.2	1.7

〔男女別〕

	小学3年生		小学6年生		中学2年生		高校2年生	
	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子
1	3.9	5.0	8.6	5.5	25.6	20.2	29.5	25.6
2	47.0	63.9	41.6	48.5	12.5	23.7	7.4	21.4
3	15.1	11.6	11.6	8.4	7.3	3.9	7.4	4.0
4	2.0	0.6	0.2	0.4	2.7	1.9	0.8	0.3
5	12.0	9.8	15.1	20.2	12.9	21.6	13.5	22.7
6	3.1	0.2	1.4	0.4	3.3	1.9	3.6	1.8
7	12.3	5.8	17.2	12.8	26.7	20.1	31.7	21.2
8	2.8	1.9	2.5	2.3	4.6	2.7	3.4	2.5
9	1.8	1.2	1.8	1.5	4.4	4.0	2.7	0.5

# 児童生徒の生活実態等に関する アンケート調査結果

兵庫県教育委員会義務教育課

【 調査目的 】 学校週5日制が月2回実施され、休日の増加にともなう児童生徒の生活の変化の実態を把握する。(※ここでは一部を抜粋して掲載した)

【 調査対象 】

	児童生徒数
小学校5年生	24,827人
中学校2年生	13,119人
高等学校2年生	6,141人
盲・聾・養護学校 小学部5年生	95人
盲・聾・養護学校 中学部2年生	135人
盲・聾・養護学校 高等部2年生	341人
合計	44,658人

【 調査時期 】 平成8年11月中旬～下旬

【 調査方法 】 (1) 小・中学校については、県下全公立小中学校各1クラスを抽出  
(2) 高等学校については、県下全公立高等学校各1クラスを抽出  
(3) 盲・聾・養護学校については、対象学年全員

ア 学校の土曜日が月2回休みであることについて。

項 目	小学校	中学校	高 校	盲・聾・養護学校			全 体 (%)
	5年生	2年生	2年生	小学部5年生	中学部2年生	高等部2年生	
①とても良い	64.8	70.5	70.9	21.1	26.7	41.0	66.8
②まあ良い	25.7	20.8	20.9	29.5	32.5	27.6	23.7
③どちらでもない	5.9	5.5	5.1	34.6	17.8	15.2	5.9
④あまり良くない	2.6	1.7	1.6	13.7	16.3	9.4	2.3
⑤まったく良くない	1.0	1.5	1.5	1.1	6.7	5.9	1.3
無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	0.0

イ 学校の土曜日が月2回休みであることで、これまでとどんな違いがありましたか。

項 目	小学校	中学校	高 校	盲・聾・養護学校			全 体 (%)
	5年生	2年生	2年生	小学部5年生	中学部2年生	高等部2年生	
①ほとんど変わらない	10.9	10.4	10.2	32.6	31.9	24.6	10.8
②学習塾・けいこ等の時間が増えた	9.5	4.1	2.0	1.1	1.5	0.6	6.8
③友達と遊ぶ時間が増えた	58.3	56.8	45.3	10.5	6.7	15.0	55.5
④家族と話す時間が増えた	29.9	18.9	12.9	15.8	22.2	19.9	24.2
⑤勉強の時間が増えた	17.7	14.7	14.0	2.1	3.0	4.7	16.2
⑥ゆっくりとする時間が増えた	64.7	68.8	50.4	62.1	55.6	57.8	63.9
⑦趣味や好きなことに使う時間が増えた	54.3	56.6	56.9	14.7	23.7	32.3	55.0
⑧地域活動などに参加する時間が増えた	8.6	2.8	2.3	5.3	3.7	4.4	5.9
⑨動物園や博物館等に行く時間が増えた	11.1	3.4	2.4	4.2	4.4	6.7	7.6
⑩その他	4.5	5.9	7.0	6.3	5.9	4.1	5.3

ウ あなたは、1日のうちで家の手伝いをする時間はどれぐらいですか。

項 目	小学校	中学校	高 校	盲・聾・養護学校			全 体 (%)
	5年生	2年生	2年生	小学部5年生	中学部2年生	高等部2年生	
①ほとんどしない	27.7	40.8	43.8	75.6	54.8	46.7	34.1
②15分ぐらい	31.9	29.2	24.2	13.7	23.0	24.0	29.9
③30分ぐらい	25.6	19.8	20.0	5.3	14.8	19.9	23.0
④1時間ぐらい	10.1	7.1	8.5	3.2	5.2	7.0	8.9
⑤2時間ぐらい	2.9	1.7	1.9	1.1	1.5	1.5	2.4
⑥3時間以上	1.8	1.4	1.6	1.1	0.7	0.9	1.7

エ あなたは学習塾やけいこごとなどに通っていますか。

項 目	小学校	中学校	高 校	盲・聾・養護学校			全 体 (%)
	5年生	2年生	2年生	小学部5年生	中学部2年生	高等部2年生	
①学習塾	41.6	62.1	19.3	4.2	5.2	2.6	44.1
②家庭教師	2.8	6.0	3.3	1.1	0.0	1.2	3.8
③通信添削	14.0	15.3	8.2	0.0	0.7	1.2	13.4
④けいこごと(ピアノ・習字など)	54.0	20.8	10.9	3.2	4.4	4.1	37.7
⑤学校以外のスポーツクラブ (スイミング、少年野球、剣道、体操)	43.0	6.2	3.5	4.2	6.7	4.1	26.3

オ 現在、部活動に入っていますか。

項 目	小学校	中学校	高 校	盲・聾・養護学校			全 体 (%)
	5年生	2年生	2年生	小学部5年生	中学部2年生	高等部2年生	
①はい	—	92.8	62.4	—	—	—	83.2
②いいえ	—	7.2	37.5	—	—	—	16.8
③無回答	—	0.0	0.1	—	—	—	—

①運動部	—	80.8	69.3	—	—	—	78.1
②文化部	—	19.0	29.1	—	—	—	21.4
③その他	—	0.2	1.6	—	—	—	0.5